

水資源分野における気候変動への適応策のあり方検討会 議事要旨

日時：令和8年4月17日(金) 14:00～15:30

場所：中央合同庁舎3号館1階水管理・国土保全局 局議室

議事概要：

事務局から資料の説明、各委員からの研究内容の発表を行った後、意見交換が行われた。主な意見は次のとおり。

○既往研究事例として1/10 渇水流量による評価事例が示されているが、渇水流量が発生する時期などをミクロ的な評価でより細かく見ていけば、より理解が深まると思う。

○検討方針（案）で全国（マクロ）での評価では人為的要素は含まないとあるが、既往研究で示されているものにはダムや取水が考慮されていないということか。

⇒国土技術政策総合研究所の西村主任研究官らが開発したモデルでは、ダム等の影響も一定程度考慮されている。

○ガイドラインについて、利水の関係者や一般の方が見て正しく理解できるようにした方が良い。また、どのように使われるのかも考慮した上で、構成を考えた方が良い。

○気候変動の影響についていつ頃起こるのかと分かってほしい。

⇒d4PDFには仮の年がついているだけで、「もし2℃上がったら」というようなものである。2℃上昇した世界が何年になるかは世界の選択次第というところがある。

○d4PDFについて、アンサンブル予測により不確実性、ばらつきをある程度表現できると説明があったが、各国のセンターで予測しているモデルの不確実性は含まれていない。日本だけを見る場合にはそういった不確実性もあるということ、ガイドラインには追加した方が良いかと思う。また、2月に環境省がまとめた影響評価報告書の内容にも触れると良い。

○強い雨が増える分、弱い雨が減ることで降水量のトータルは変わらない一方、蒸発は確実に増えるため、年間の流量が減る傾向にあるというのは、そのとおりであると考えられる。また、田中委員の陸面モデルなどのように、エネルギー収支を厳密に解くモデルは、融雪や蒸発散の精度が非常に高く、特に月単位の収支が正確に合う。

- 総論部分については、科学的に正しい内容であっても、受け手によって解釈が異なる可能性がある点に留意が必要である。
- 過去の実績データを用いて、例えば 1961 年から 1990 年と 1991 年から 2020 年の 30 年ずつを比較し、蒸発散量が増えて水資源量が減少することで、後者の方では湧水流量が下がっているといった事象が示せると現場の方にも分かりやすいのではないか。